『経済学批判要綱』における貨幣生成の論理

——価値形態論志向の発展の追跡——

平　井　規　之

(1)

マルクスにおける貨幣導出理論が，『経済学批判』(1859)から『資本論』第1巻初版(1867)，同第2版(1872)へと彫琢されてゆく過程で，価値形態論の系譜が交換過程論の系譜から次第に分離・独自化される方向で歩みを進めていることは周知の通りである。従って，この第2版を底本とする現行『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」では，第1章第3節の《価値形態論》と第2章の《交換過程論》とが両々相俟って貨幣を導出するという体裁を採るにいたっている。すなわち，第1章第3節においては，価値表現のより十全な展開を追跡することによって論理的に貨幣＝一般的等価形態の必然性が論証され，第2章においては，現実の全体的なものとしての，使用価値と価値との統一物としての商品が交換過程で遭遇する矛盾——商品の使用値価としての実現と価値としての実現との相互前提・相互排斥関係——を媒介するものとして貨幣商品が導出されている。ここに《価値形態論》と《交換過程論》とが両々相俟って貨幣導出の論証にあづかっているというわけは，一方，交換過程での矛盾を媒介する第3者としての一般的等価物に，他方，価値形態論でその必然性が論証される一般的等価形態が接合され，そのことによって，貨幣の導出，《商品と貨幣とへの商品の2重化》[1]が，論理的な価値形態論と現実的な交換過程論との結節において論証されているからに外ならない[2]。

ところで，『資本論』第1巻第2版に至る貨幣導出の展開が，このように交換過程論からの価値形態論の分離という方向で歩みを進めているとすれば，いま仮りにわれわれが『経済学批判要綱』(1857-8)それ自体に接することなしに，『資本論』第1巻第2版，同初版，『経済学批判』へと逆行して『要綱』の内容にいわば extrapolation を施すならばどういうことになろうか。当然予想されることは，『要綱』においては，少くとも価値形態論の系譜と交換過程論の系譜とがいまなお未分化のままにとどまっていること，いな，ひよっとすると価値形態論は欠如しているか，もしくはその全く萠芽的な形態でしか存在しないということだろう。そして，以下にみる通り，このことは事実全くその通りであって，『要綱』はいまなお価値形態論を展開しうべき認識水準に到達しえないままに貨幣導出を試みているのである。

したがってわれわれは，《『草案』のなかにも，すでに本質的には，こうした問題〔価値形態論が解明すべき問題——引用者〕について解答がみいだされる》[3]とか，《なるほど価値論の体系的説明はまだ全く存在しないけれども，すでにそのすべての本質的要素(価値，価値形態，価値表現，価値形成労働，価値形成，価値法則等々)は科学的に基礎づけられている》[4]とか，《要するに，『要綱』中には価値論の体系的展開はおこなわれていないが，その主要な局面は——たとえ，その多くのものが萠芽的形態にとどまるにしても——存しているといってよいであろう》[5]とかいった『要綱』解釈には俄かに賛同することはできない。なるほど，『要綱』の中に『資本論』へと開花する萠芽が《本質的に》存在しなかったといえば間違いであろ

1) 『資本論』第1巻 [8] S. 102，訳117ページ。

2) この点については久留間 [13] から大いに学んだ。

3) ロスドルスキー [18] S. 138，訳170ページ。

4) リヒター／ズィーバー [17] S. 158，強調は引用者のもの。

5) 遊部 [9] 25ページ。

うが，逆にまたその種のことを主張する人はいないだろうし，実際，《本質的に》存在していたといってみても始まらないことも確かである。私見では，グルントリッセ公刊の最大の意義は苦闘せる巨匠のその苦闘の跡を親しく垣間みることができるところにあるのであって，その見地からすれば，不動の目標としての『資本論』を静止した素材としての『要綱』に外的に適用し，『要綱』のうちに『資本論』をたんに再確認することによって空疎な興奮を覚えるが如きは，われわれのとうていなしうるところではない。『要綱』との対決とは，『要綱』英訳著が述べているように，《のちになって，できあがった・みがかれた・引用可能な・結論の形をとるアイディアを，著者がその頭の中でいかにつくりだしていったかの一端》[6]を探ることでなければならない。価値形態論にかんしていえば，われわれはむしろトゥーフシェーラーの次のような慎重な解釈に学ぶものである。《確かに『要綱』には，のちにマルクスが『資本論』第1巻で簡単な価値形態ないしは全体的な価値形態のもとに考察している諸設問が切り出されている箇所が若干あるけれども，これらの思考は総じてまだ詳論されておらず，せいぜい，のちにそこから価値形態の発展の学説がでてくるところの若干の萌芽をなしているにすぎない。これらの思考はまだきわめて未展開のままなので，完全に成熟した・そのものとしての・マルクスの価値論の出発点と認めることができるだけである》[7]。

本稿は，このような立場から，まず，『要綱』における貨幣導出へのアプローチがむしろ価値形態への展開を峻拒する認識水準からおこなわれていることを明らかにし，次いで，この時点での貨幣生成の論理を確定し，最後に，価値形態論への展開を阻止していた認識の呪縛がいかに解かれていったかを検討したものである。

6) M・ニコラウス [5] への序文，p. 25. 強調は原文のもの。

7) トゥーフェーラー [21] S. 366. 上掲リヒター／ズィーバーが，かれらのあの主張の傍証としてトゥーフシェーラーのこの研究の参照を求めていることは，少くとも滑稽である。

(2)

『経済学批判要綱』における貨幣導出の試みは，原文59ページに始まる。このことは，著者自身が自分のノートのためにつくったインデクスにおいて，《価値の貨幣への移行》としてノートIの13ページ，つまり印刷された『要綱』の59ページを指示している[8]ことから明らかである。そこでまず，この問題提起の部分を検討し，この時点での貨幣導出へのアプローチにみられる特徴を明らかにしたい。その特徴をひと言でいえば，『要綱』はいまなお価値形態論の展開という認識水準に立ちきらないままに課題の解明に乗り出しているということである。

次の叙述が問題提起をなしている。

《価格と価値との相違……は，商品の現実の交換価値が表現される尺度としての第3の商品を必要とする。……価値尺度としての労働時間はただ観念的にのみ存在するだけだから，それは価格の比較の材料としては役立たない。(ここで同時に，いかにしてまたなにゆえに，価値関係が貨幣において一つの物質的な，かつ特殊化された存在を受け取るかが明らかになる。この点はさらに詳論のこと。)価格と価値との相違は，価値が価格としてはそれ自身に固有なものとは別の尺度基準で測られることを要求する。価値と区別された価格は必然的に貨幣価格である》(58-9，訳61)[9]。

文中(　)内の《いかにしてまたなにゆえに，価値関係が貨幣において一つの物質的な，かつ特殊化された存在を受け取るか》という設問こそ，われわれが検討しようとする貨幣生成の必然性の解明という問題提起である。こうして『要綱』は，このパラグラフの次にあらためて[10]以下の価値関

8) 『要綱』[1] S. 855。

9) 数字はページ数，前者は『要綱』原文[1]，後者は日本語訳[2]．但し，訳文に変更を加えた場合がある．なお強調はすべて原文のものである。

10) 日本語訳[2] 62ページでは，この価値関係式の次のパラグラフに§符号が付けられているが，ロシヤ語訳[3]第1部 стр. 81 のように，むしろこの価値関係式のパラグラフから新しい節が始まるものとすべきであるように思われる。

係式を定式化して課題の解明に入る。すなわち，

《商品 $a=1$ シリング(すなわち$=1/x$ 銀)；商品 $b=2$ シリング(すなわち$=2/x$ 銀)。だから，商品 b は商品 a の2倍の価値。a と b とのあいだの価値関係は，両者が，価値関係とではなく[11]，第3の商品の分量と，銀と，交換される比率によって表わされている》(59，訳61-2)。

以上が導入部分の紹介である。

ここに設定された問題は，のちに『資本論』第1巻において，《諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な，最もめだたない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡すること》[12]，そしてそれと同時に一般的等価形態の必然性を論証することによって貨幣の謎——諸商品の価値および価値量は，なにゆえ商品金およびその一定分量によって表現されるのかという謎——を解消せしめる価値形態論として結実をみる問題である。これに対して，ここで何よりもまず眼につくことは，『要綱』がいま《商品 $a=1$ シリング云々》として価格規定を受けた商品をまさに眼前において課題の解明に乗り出したことである。そこから問題が生ずる。

価値形態一般と価格形態とは，商品の価値が他商品の商品体，すなわちその使用価値によって表現されるところに同一性をもっている。だが，価格形態は価値形態一般に対して或る特殊性をもっている。それはつまり，商品世界の共同事業によってのみ成立する一般的等価形態がすすんで社会的慣習により商品金の独自な自然形態に窮極的に癒着し，こうして諸商品がこの貨幣商品金での相対的価値表現を受け取ることにある。

だとすれば，ここで価格規定を受けた商品が眼前におかれていることは，そこではすでに商品と貨幣とへの商品の2重化が前提されていることを意味する。いいかえれば，ここでは，貨幣の存在を前提しつつ貨幣の導出が試みられているのである。これが循環論であることは論を俟たない。

のみならず，ここで価格規定を受けた商品が眼前におかれているということは，価値形態が最初からその完成形態たる価格形態において把えられていることを意味する。逆にいえば，価格形態は価値形態一般と区別されずに両者が混然一体化されて表象されていることを意味する。この表象における経済学的意識が価値形態とその媒介された価格形態とを形態上の関連として展開する認識水準に突き進みえないことはこれまた論を俟たない。いな，むしろこれは価値形態論への展開を閉ざし，峻拒せしめる認識水準であるといわねばならない[13]。

第2。ここでの主要な強調点は価値と価格との相違である。これは，『要綱』に貨幣導出のとりくみへのきっかけを与えたところのプルドン学派における労働貨幣論ないし時間紙券論に向けられた批判であって，のちに『要綱』が「果実をもたらすものとしての資本」を考察するさいに次のように述べていることに関連している。すなわち，《なぜ労働時間は価値の実体であり尺度であっても，同時に価格の尺度ではないのか。あるいは，いいかえれば，そもそもなぜ価格と価値は異るのか。プルドン学派は，両者の同一性を措定し商品の価格を労働時間で表現すべきだと要求することによってたいしたことをやっているつもりでいる》(680，訳751)。つまり，一定の労働時間を額面に記載する時間紙券なるものが金属貨幣と置換可能であるというプルドン学派の主張は，結局のところ，価値と価格とが置換可能であるとする主張に帰着せざるをえないというのがここでの推論である。これに対して『要綱』は，上掲のように，《価格と価値の相違は，価値が価格としてはそれ自身に固有なもの〔労働時間——引用者〕とは別の尺度基準で測られることを要求する》と強調するのである。だが，その場合，ここで用意されている価値と価格との相違にかんする理論的規定は，あくまでも量的なそれにとどまっているのであっ

11) 原文は nicht gegen ein Wertverhältnis であるが，筆者には理解不可能。人あって，ご教示あれば幸甚である。

12) 『資本論』第1巻 [8] S. 62，訳65ページ。

13) さらにいえば，ここでは商品 a の価値が銀の $1/x$ 量によって表現されていることそれ自体に何の不思議も認められていない。貨幣の謎がいまだ謎として解明の対象になっていないことが分る。

て，けっして形態上の区別と関連とが措定されているのではない。

『要綱』が指摘する価値と価格との相違とは次のようなものである。《労働時間によって規定された商品の価値は，ただその商品の平均価値であるにすぎない。この平均はそれが一定期間の平均数値として合算されてひき出される限り，外的抽象として現われる。……だが，この平均は，それが同時にある一定期間中に商品価格が経過する諸変動の推進力および運動原理として認められるとき，きわめて現実的である。……市場価値〔市場価格——引用者〕は，そのたえざる変動を通じて，第3者としての実質価値との均等を通じてではなく，自分自身の不断の不均等を通じて(……)自己を実質価値に平均化する。……したがって，価格が価値と区別されるというのは，あたかも名目が実質と区別されるように，というだけではない。つまり，金や銀での呼称によってだけでなく，価値は価格が経過する運動の法則として現われるということによっても区別されるのである》(56，訳58-9)。つまり，価値は，一定期間中に商品価格が経過する諸変動の《推進力および運動原理》として，あるいは《運動法則》として，価格変動の中で価格変動によって与えられるところのいわば平均概念として現実的に措定されるのであり，そのようなものとして価値と価格は異るというのが，その主旨である。

なるほど，価格変動の中心に位するこのような平均価格においては価値と価格とはそれらに含まれる価値量において一致しているだろう。そこでは需給はすでに一致しており，したがってその作用はゼロであろうから，当然に《現在必要な労働時間が価値の規定者である》(54，訳56)といえよう。しかしその場合，まさに平均化されるところのものが《必然的に貨幣価格である》とされた市場価格であるとすれば，平均値それ自体は依然として価格タームで規定されているとしなければなるまい。だとすれば，一方必要労働時間によって規定される価値と，他方変動する価格のその変動によって現実的に措定される平均価格とは，やはり概念的には全く別個のものとしなければなるまい。『要綱』を一読すれば分るように，そこではまだ《価値》と《交換価値》とがテクニカル・タームとして厳密に使い分けられていない。『要綱』はまだ価値と交換価値とを概念的に区別しうる地平には立っていない。だが，価値と交換価値との概念上の区別の欠如は，当然のことながら，それらのあいだの形態上の連関づけの欠如を必然的に伴うのであって，あたかも価値形態が直接にその価格形態において把えられていたように，価値とその形態＝交換価値とは全く一致したものとして把えられているのである。総じてここでは，プルドン学派に対する批判としての価値と価格との相違の強調のみに急で，両者の連関をいかに把えるかという視点はなきに等しい。少くとも《価値と価格との相違は，価値が価格としてはそれ自身に固有なものとは別の尺度基準で測られることを要求する》という主張は，労働(時間)による価値規定の問題と価値の表現の問題とが全く別個の問題系列に属するものとして把えられていることを示している。要するに，ここにおいてもまた，『要綱』が価値形態論への志向を欠如したまま貨幣導出を試みていることが確認できるのである。

最後に，ここでの問題提起の仕方もまた特徴的である。すなわち，《いかにしてまたなにゆえに，価値関係が貨幣において一つの物質的な，かつ特殊化された存在を受け取るか》と。つまり，主語は価値ではなく《価値関係》である。しかもそれは，《関係する主体とは区別して確定されなければならない》(61，訳64)関係であるとされている。そのような《価値関係》が貨幣という物質的な存在を受け取るのはなぜか，というのだから，これはまことにあいまいな問題提起であるといわねばならない。ちなみに『資本論』では，この《価値関係》なる用語の使い方はきわめて明快であって，それは，価値を表現する主体たる商品と，これに表現材料として相対する別の商品との関係，あるいはそのような関係のおこなわれる場を意味する[14]。

14)　一，二の例をあげれば，《上着がリンネルの等価物となっている価値関係のなかでは，上着形態は価値形態として認められる》。《上着，すなわち上着商品の身体は確かにひとつのたんなる使用価値である。

ところが，『要綱』では表現主体なり表現材料なりの諸商品に注目するのではなく，いきなり諸商品を統括する《価値関係》なる関係概念を主語にし，これに注目するのである。それが実際に何を意味しているかは，すぐあとで明らかにするが，いづれにせよ，ここには価値表現の主体としての商品とこれに対する表現材料としての他商品といった価値形態論提起の視角は全く欠如していることが確認できるのである。

以上，3つの側面から明らかにしてきたように，『要綱』における貨幣導出へのアプローチはむしろ価値形態論への展開を阻止するような認識水準からおこなわれていることが確認できる。『要綱』における価値形態論の存在なるものを軽々しく云々できないことはもはや明らかである。そこで次に，そのような段階で確定された貨幣生成の論理とは何であったのか，これを検討しよう。この検討は，価格規定を受けた商品を眼前においたことがいかにその後の分析に否定的な作用を及ぼしたかを明らかにするであろう。

(3)

貨幣導出のこの最初の試みについて，『要綱』はその要約の1つにおいて次のように述べている。

《したがって，過程は簡単に次のようになる。生産物が商品に，すなわち交換のたんなる契機になる。商品は交換価値に転化される。商品は，自分を交換価値としての自分自身に等置するために，交換価値そのものとしての商品を代表する章標と取り換えられる。次いで商品は，そのような象徴化された交換価値として，ふたたび他のいづれの商品とも一定の割合で交換されうる。生産物が商品に，商品が交換価値になることによって，それは初めは頭の中で2重の存在を受け取る。この観念的な2重化は，商品が現実の交換において2重に，つまり一方では自然的生産物として，他方では交換価値として2重に現われるまでに至る(そしてそこまで進まなければならない)。すなわち，商品の交換価値は物質的に商品から分離された存在を受け取る。したがって，交換価値での生産物の規定は，交換価値が生産物から分離され，解放された存在を受け取ることを必然的に伴っている。商品それ自体から解放され，みずから一つの商品として諸商品と並存する交換価値は貨幣である。交換価値としての商品の属性は，貨幣において，商品とは異る対象として，商品の自然的存在形態から解放された社会的存在形態として現われる。(……)(……)。したがって，生産物の交換価値は，生産物と並んで貨幣を生み出す》(63-4，訳66-7)。

この貨幣導出でカギをなしているのは次の叙述である。《生産物が商品に，商品が交換価値になることによって，それは初めは頭の中で2重の存在を受け取る。この観念的な2重化は，商品が現実の交換において2重に，……現われるまでにいたる》。要するに，商品と貨幣とへの商品の観念上の2重化が現実の2重化に移行するというのがその基本内容である。これは何を意味するのだろうか。

『要綱』における貨幣導出は一見すると難解であるが，『要綱』がどのような事態を念頭においているかが分れば，その理解はきわめて容易である。次の叙述はそれを明らかにしている。

《時々刻々，計算，記帳等々においてはわれわれは商品を価値章標に転化し，商品の素材やそのあらゆる自然的属性から抽象して，商品をたんなる交換価値として記入する。紙上では，頭の中では，こうした変態はたんなる抽象によっておこなわれている。しかし，現実の交換においては，こうした抽象を実現するために，一つの現実的な媒介，一つの手段が必要である》(60-1，訳63)。ここで看取されることは，紙上での，頭の中での抽象と現実的な媒介との対比である。これは要するに，貨幣の価値尺度機能とその流通手段機能との対比にほかならない。つまり，貨幣がただ観念的にのみ必要とされる価値尺度としての貨幣からそれが現実に必要とされる流通手段としての貨幣への

上着が，価値を表わしていないことは，有り合せのリンネルの一片が価値を表わしていないのと同じことである。このことはただ上着がリンネルとの価値関係のなかでは，その外でよりもより多くを意味することを示しているだけである》(『資本論』第1巻[8] S. 66，訳70ページ．強調は引用者のもの)。

移行——これがここで念頭におかれている事態なのである。《たんなる比較——生産物の評価——のためには，商品の観念的な価値規定のためには，こうした頭の中での転態をおこなうだけで十分である。(……)。商品の比較に際しては，こうした抽象で間に合う。現実の交換に際しては，この抽象はふたたび対象化され，象徴化され，一つの章標によって実現されなければならない》(62，訳65)。すでにわれわれは，『要綱』が価格規定を受けた商品を眼前において課題の解明に乗り出したことによって，事実上貨幣の存在を前提しつつ貨幣の導出を試みていることを知っている。みられるように，前提された貨幣がその観念的存在(価値尺度)から現実的存在(流通手段)に移行するというのが，ここでの貨幣導出の基本内容をなしているのである。だから，ここでは，下図のような移行が考えられていることになる。

$$\mathrm{Wa} \overset{\mathrm{G}}{\diagup\!\!\diagdown} \mathrm{Wb} \rightarrow \mathrm{Wa—G—Wb}$$

こうして以下，このように前提された貨幣の観念的存在から現実的存在への移行を理論化することが『要綱』の試みている貨幣導出の内容をなすことになる。したがって，貨幣は事実上2度導出されることになる。1度めは観念的存在として，2度目は現実的存在として。その場合，1度めの，観念的存在としての貨幣の導出はきわめて抽象的な議論となっている。

《生産物(または活動)は，商品としてのみ交換される。交換それ自体のうちにある商品は，価値としてのみ存在し，そのようなものとしてのみ比較される。私が1エルレの亜麻布と交換することのできるパンの重さを確定するために，私はまず，1エルレの亜麻布，イコールその交換価値，つまりイコール $1/x$ 労働時間とおく。同様に私は，1ポンドのパン，イコールその交換価値，イコール $1/x$ または $2/x$ 等々の労働時間とおく。私はいづれの商品をも第3者に，つまりそれ自身とは等しくないものに，イコールとおく。両者とは異るこの第3者は，ある関係を表現するから，さしあたりまず頭の中に，表象の中に存在する。ちょうど諸関係が一般に，関係する主体とは区別して確定されなければならない場合，考えられうるだけであるように》(61，訳64)。

ここに措定された第3者としての貨幣は，厳密にいえば，導出されたものとはいえない。《商品 $a=1$ シリング云々》としてすでに前提されていたすでに表象のうちにあった価値尺度としての貨幣のありようをただそのまま描写しているにすぎない。だから，ここでは，貨幣がただ観念的にのみ必要とされる価値尺度機能のその観念性が，《ちょうど諸関係が一般に，関係する主体とは区別して確定されなければならない場合，考えられうるだけであるように》という根拠づけを受けている。しかし，ここに要請される第3者とは，要するに当該両商品とは異る第3者という規定を受けているだけだから，それは必ずしも労働時間であるとは限らないばかりか，必然的に貨幣であるとも断定できない。たんにある関係を表現しうる名称でさえあればよいことになる。かくて，発達した貨幣関係のもとでの《シリング》名も，直接的生産物交換にたずさわる西アフリカ海岸のニグロが用いる《バール(bar)》(61，訳64)名も同日の談として論じられることになる。観念的存在としての貨幣の導出はこのようなものにとどまっているのである。

上掲，《両者とは異るこの第3者は，ある関係を表現する》という叙述は，先にわれわれが疑問を提出したここでの問題提起，すなわち《価値関係》が貨幣において物質的存在を受け取るのはなぜかという問題提起の意味を明らかにしている。ここで価値が貨幣という物質的存在を受け取るのはなぜかと設問しないで，《価値関係》が云々としているわけは，ここで念頭におかれた移行が，《価値関係》を統括する観念的存在としての第3者が現実的物質的存在としての第3者に移行するという事態だったからなのである。したがって，『要綱』がたずさわろうとする本来の移行，本来の貨幣導出は，第2の現実的導出である。そこで次にこの本来の貨幣導出をみることにする。

この本来の貨幣生成とは，商品と貨幣とへの商品の観念上の2重化が現実の2重化に転化するというものであった。かくして，この移行のために

は，移行の発条，ないしは移行を媒介する論理が必要である。そしてそれは矛盾の論理である。

《価値としての商品の属性は，商品の自然的存在とは異った存在をとることができるし，またとらなければならない。なぜか。商品は価値としてはただ量的にのみ互いに異っているのだから，どの商品も質的には自分自身の価値とは異っていなければならない。したがってまた，商品の価値は，商品と質的に区別されうる存在をもたなければならず，そして現実の交換においては，こうした可分離性が現実の分離にならなければならない。なぜなら，諸商品の自然的相違性がそれらの経済的等価性との矛盾に陥らざるをえず，そして両者は，商品が2重の存在を取得し，自然的な存在とならんで純粋に経済的な存在を取得することによってのみ，並んで存続することができるからである……》(60，訳62-3)。すなわち，《現実の交換においては……諸商品の自然的相違性がそれらの経済的等価性との矛盾に陥らざるをえ》ないところに，商品と貨幣とへの商品の2重化の根拠があるというのである。より立入って，それはいかなる意味での矛盾なのだろうか。

商品は，経済的等価性をもったものとしては，すなわち価値物としては，いつでも他のいづれの商品とも交換できるはずのものである。《一定の価値をもつ1冊の書物と，同じ価値をもつ一塊のパンとが相互に交換され，それらは同じ価値であってただ異る物質のうちに存在するにすぎない。価値としては，商品は同時に他のすべての商品に対する一定の割合での等価物である》(59-60，訳62)。だが，《商品は，その自然的属性においては，いつでも交換可能なものとしても，他のいづれの商品とも交換可能なものとしても，措定されてはいない》(61，訳63)。《価値としては，商品の交換可能性の尺度は，商品自身によって規定されている。交換価値は，商品が他の商品と取り換えられるまさにその関係を表現する。現実の交換では，商品は，その自然的諸属性に関連し・また交換者の諸欲望に対応する・数量でのみ交換可能であるにすぎない》(60，訳63)。つまり，ここで措定されている矛盾とは，価値物としての商品の等価性ないしは交換可能性と，こうした属性の発現を妨げ制約するものとしての商品の自然的存在とのあいだの矛盾である。かくして，この矛盾は媒介されなければならない。いかにしてか。《商品の交換価値への転化は，商品を他の特定の商品に等置するのではなく，商品を等価物として，他のすべての商品に対する交換可能な割合として表現する。頭の中で一挙におこなわれるこの比較は，現実では，ただ一定の，欲望によって規定された範囲内においてのみ，しかも漸次的にのみ実現されるだけである。(……)。だから，商品を一挙に交換価値として実現し，商品に交換価値の一般的作用を賦与するためには，特定の商品との交換では十分ではない。商品は，それ自身がまた特殊の商品ではなく，商品としての商品の象徴，商品の交換価値それ自体の象徴である第3の物と交換されなければならない》(62-3，訳65-6)。かくして，《商品を一挙に交換価値として実現する》この第3者としての貨幣の出現によってかの矛盾は媒介されることになる。以上が，本節冒頭に引用した結論的要約の論証である。すなわち，《生産物が商品に，商品が交換価値になることによって，それは初めは頭の中で2重の存在を受け取る。この観念的な2重化は，商品が現実の交換において2重に，つまり一方では自然的生産物として，他方では交換価値として2重に現われるまでに至る(そしてそこまで進まなければならない)。……商品それ自体から解放され，みずから一つの商品として諸商品と並存する交換価値は——貨幣である》。

『要綱』がここに，商品の2重性を発見し，事実上，商品を使用価値と価値との統一物として把えているといっても[15]，あながち想像力の不当な拡大ではない。なぜなら，ここでは事実上交換過程における商品の価値としての実現に対するその使用価値としての実現の対立関係が析出されているからである。われわれはしかし，いまはこの問題は措いて貨幣導出についてのわれわれの検討を展開しなければならない。

15)　例えば，トゥーフシェーラー[21]第3篇第9章第4節「商品の分析，商品の2重性ならびにその内的矛盾の発見」。

『要綱』は，この最初の貨幣導出をひとまず試みたあとで，次のような反省を記している。《この問題から離れる前に一言すれば，概念諸規定やこれらの概念の弁証法だけを事としているかのような外観をもたらす叙述の観念的方法を訂正することがのちに必要となるだろう。したがって，とりわけ，生産物(または活動)が商品に，商品が交換価値に，交換価値が貨幣になるといったきまり文句が問題だ》(69，訳72-3)。

本節冒頭に引用した要約が，《過程は簡単に次のようになる。生産物が商品に，すなわち交換のたんなる契機になる。商品は交換価値に転化される云々》として始まっていることから分るように，『要綱』における貨幣導出は，生産物→商品→交換価値→貨幣という商品交換の歴史的発展[16]に即した発生的方法を意識的にとっており，この方法的反省は，これら4者の概念の移行がいかにも概念弁証法的常套形式にのっとって叙述されているかにみえることに向けられたものである。すなわち，生産物→商品→交換価値→貨幣としてその順序・系列が先験的に把握されている歴史の歩み，その意味では論理にとってあらかじめそのレールが敷設されたところの歴史の歩み——このような歴史の歩みを論理がたどるという叙述のあり方が，論理の歩みにも，独自の生命をもった何物かが一方の概念から他方の概念に乗り移るといった展開形式を与えざるをえなかったことをここで著者が鋭く自己批判しているのではないかと思われる。

ところで，この乗り移りの最適の例がこの貨幣導出の場合にみられるのである。『要綱』は，上述のような論理によって，現実の交換における矛盾を第3者としての貨幣によって媒介させることによって貨幣を導出するのであるが，そのような事態をさして，《すなわち，商品の交換価値は物質的に商品から分離された存在を受け取る》といっている。これは別の要約で，《商品の変換価値は，商品に内在する貨幣属性である。この商品の貨幣属性は，商品から貨幣として解放され》(65，訳68)るとされていることと同じであるが，ここに，商品の貨幣属性たる価値が，商品それ自体から《分離され》《解放され》た存在を受け取るといわれても，具体的即物的には一体どのような事態をさしているかがさっぱり分らないのである。これこそまさに交換価値概念の貨幣概念への乗り移りにほかならない。だから，《このような導出は，「作為的なもの」——経済的諸概念に独自の生命を賦与して，それらを全くヘーゲル的な方法で別々に出現させ相互に移行させるたんなる「概念の弁証法」の事例——であるかのように思われるかもしれない》というロスドルスキーの評言は，けだし，正鵠を得たものであって，しかもそれはたんにロスドルスキーのいうように，ひとり《マルクスの学説に精通していない読者にとって》[17]のみ生ずる印象ではないのである。

それでは一体，なぜこのようなことになったのだろうか。この貨幣導出はなぜこのような概念弁証法の常套形式にかたむいてしまったのだろうか。

ここでわれわれは，かの問題提起の際の主語が《価値関係》であったことを想起しなければならない。すなわち，『要綱』が直接にたずさわってきたのはけっして《価値の貨幣への移行》それ自体ではなかった。直接たずさわってきたのは，商品と貨幣とへの商品の観念上の2重化が現実の2重化に転化し，移行する論理の解明であった。価値尺度としての貨幣から流通手段としての貨幣への移行だった。この移行の発条としての交換の矛盾の措定と，これを媒介する第3者としての貨幣の導出だったのである。ところが，直接おこなわれているのはこうした移行の解明であるにもかかわらず，この移行によって，《すなわち，交換価値は

16)　この連関が商品交換の歴史的発展そのものと理解されていたことは，のちに『経済学批判』において，これら4者の連関が次のように使われていることからも分る。《交換過程の自然発生的形態である物々交換は，……使用価値の商品への最初の転化の始まりを現わしている。……使用価値［は］ここで使用価値であることをやめて，交換の手段に，商品になる……物々交換の漸次的拡大，交換の増大，物々交換に入ってくる商品の多様化は，商品を交換価値として発展させ，貨幣形成にまで押し進める》(『経済学批判』[6] S. 35-6，訳34ページ，強調は引用者のもの)。

17)　ロスドルスキー[18] S. 143-4，訳178ページ。

物質的に商品から分離された存在を受け取る》という形でこの移行を《価値から貨幣への移行》と解釈しなおしているのである。だからこそ，あの乗り移りの印象を与えることになったのである。

これを逆にいま導出された貨幣の側からみれば，この第3者は一体何であろうか。それはかの交換の矛盾を媒介するものであった。しかし，この論理だけで，《国家が協定によって発生しないと同じく，貨幣は協定によっては発生しない》(83，訳86)といいきれるだろうか。この主張それ自体は正しいとしても，これまでみてきた貨幣導出の論理は必ずしもこの主張を裏づけるものとはなっていないように思われる。こうしてわれわれは，この貨幣導出の帰結として，『要綱』が次のような論拠によって貴金属研究にとりくむことをみるのである。《これまで展開したことから出てくるのは，次のことである——ある特殊な生産物(商品)(物質)が，いづれの交換価値の属性としても存在する貨幣の主体にならなければならない。こうした象徴が表示される主体は，けっしてどうでもよいものではない。というのは，表示するものに対する要求が，表示されるべきものの諸条件——概念諸規定，一定の諸関係——のうちに含まれているからである(90，訳93-4)[18]。

こうしてわれわれはみてきた。第1に，『要綱』における貨幣導出とは観念的存在としての貨幣の現実的存在への移行であったことを。第2に，そのさい観念的存在としての，《価値関係》の体現者としての第3者の規定は必ずしも貨幣を要求するものではなかったことを。第3に，現実的導出は交換過程の矛盾を媒介する第3者としての貨幣を生成させるという論理でおこなわれたが，しかし，そのことは必ずしも《価値の貨幣への移行》それ自体の論証とはなりえていなかったことを。かくして，この『要綱』における貨幣導出の難点をもちきたらせたものは，『要綱』が，商品と貨幣とへの商品の観念上の2重化を現実の2重化に転化させることを，貨幣の現実的導出として誤解していたことにある。そしてこの誤解を最深部において規定しているものは，『要綱』がまさに価格規定を受けた商品を与えられたものとして眼前におきつつ課題の解明に乗り出したことにほかならない。すなわち，価値形態を直接にその価格形態において把えた認識の呪縛こそ，この貨幣導出の難点を最深部において規定した秘密であった。

われわれは次に，この認識の呪縛が，『要綱』内部においていかに解かれていったかをみなければならない。

(4)

これまでの検討から明らかになったように，『要綱』における貨幣導出へのアプローチも貨幣導出の論理も，主体としての価値とその表現の仕方・様式を問う価値形態論への展開とは程遠い地点からおこなわれている。そしてこの価値形態論への展開を妨げた認識の呪縛は，《商品 $a=1$ シリング($=1/x$ 銀)；商品 $b=2$ シリング($=2/x$ 銀)》という定式を眼前において，価値形態を直接にその価格形態に固着させて把えていたことにあった。しからば，『要綱』は，いかにして価格形態への執着から解放されてゆくか，これがここでの問題である。

ところで，いまや，不十分ながら貨幣の導出，すなわち商品と貨幣とへの商品の2重化それ自体が現実のものとなっている。『要綱』はいまや秘かにではなく，現実に商品と貨幣とを眼前におくことができる。そしてここに，一般商品と関連した貨幣商品の分析の中で課題の解決がはかられていくのである。

さて，かの貴金属論のあとに流通論がつづく。そこであらためて貨幣導出を想起しつつ，『要綱』は次のように述べる。《商品は交換価値として規定されている。交換価値としては商品は一定の割合で(その商品に含まれる労働時間に比例して)他のすべての価値(商品)に対する等価物である。だ

18) 貴金属論は，『批判』原初稿ではドロップする。《なぜ他の諸商品でなくて金銀が貨幣の材料として役立つかという問題は，ブルジョア体系の限界の彼方にある。……答はかんたんであって，貴金属の独自な自然的属性，すなわちその使用価値としての属性は，他のすべての商品にまさって，貨幣機能の担い手たる資格を貴金属に与える経済的機能に照応しているということである》(895，訳1015)。

が商品は，こうした商品の規定に直接には一致しない。交換価値としては商品はその自然的定在における自分自身とは違っている。商品をそのようなものとして措定するためにはひとつの媒介が必要である。だから，貨幣においては交換価値が何か別のものとして商品に相対する。貨幣として措定された商品が初めて純粋な交換価値としての商品である。あるいは純粋な交換価値としての商品が貨幣である》(103，訳108)。ここまでは貨幣導出の復習である。だがこれにつづけて，いまや現実の2重化の結果が眼前におかれる。すなわち，《だが同時に，いまや貨幣は商品の外部に，商品とならんで存在している。……いまや貨幣は，すべての商品の交換価値として，すべての商品とならんで，その外部に存在する。……貨幣は，貨幣価値の，交換価値としての商品の一般的分母となる》(同上)。かくして価格は次の規定を受ける。《貨幣で表現された，つまりに貨幣に等置された交換価値は，価格である》(103-4，訳同上)。かの問題提起の部分ではこういわれていた。《価値と区別された価格は必然的に貨幣価格である》。そしてこれはまさに，価値形態をその価格形態において把えることの，あるいは価格形態を価値形態そのものとして把えることの宣言をなすものに外ならなかった。

しかし，ここでは一歩前進がはかられている。すなわち，価格とは貨幣で表現された交換価値であるにせよ，しかし，貨幣で表現されるということは，貨幣と等置されることだ言い換えられているからである。こうして『要綱』は，《貨幣という規定性におかれた交換価値は価格である》(104，訳109)として次のように認識を深めてゆく。すなわち，《貨幣が価格の尺度であり，したがって交換価値が貨幣で互いに比較されるということは，それ自身からでてくる規定である。だが，以後の展開のためにより重要なことは，価格において交換価値は貨幣と比較されるていることである》(同上)。すなわち，ここで《以後の展開のためにより重要》とされているのは，価格という形態は交換価値の貨幣との比較によってとられる形態であるという認識である。かつての認識において比較されていたのは，交換価値と交換価値とであった。そして《価値関係》の体現者としての第3者がこの比較を媒介していたのである。だが，いまや比較されるべきは交換価値と貨幣とであるとされている。かくして『要綱』は次の認識に突き進む。《しかし，貨幣が商品の外部に自立した存在をもつことによって，商品の価格は，交換価値ないしは商品の・貨幣にたいする・外的な関係として現われる。商品は，それがその社会的実体からすれば交換価値であったのと同じようには，価格ではない。この規定性は，商品と直接には一致せず，その貨幣との比較によって媒介されている。商品は交換価値である。だが商品は価格をもつ。……価格はもはや商品の直接的規定性ではなく，反射された規定性である。現実の貨幣とならんで，いまや商品は観念的に措定された貨幣として存在している》(105，訳110)。

《商品は交換価値である。だが商品は価格をもつ》。《価格はもはや商品の直接的規定でなく，反射された規定である》。ここにおける認識が一歩前進というわけは，このような水準における認識は，もはや課題の解明にさいして価格規定を受けた商品を眼前に置くことをとうてい許さない認識だからである。すなわち，ここではすでに，価格規定を受けた商品とは，《現実の貨幣とならんで，……観念的に措定された貨幣として存在している》商品であることが認識されているのである。

流通論において，商品と貨幣との2重の存在を分析することによって，『要綱』の認識は以上のような一歩前進をはかった。こうして飛躍の準備は整った。価値尺度と流通手段とに次ぐ《第3の規定》(117，訳122)としての，《富の物質的代表物としての》(同上)自立した貨幣を分析するとき，『要綱』の認識は一挙に飛躍する。『要綱』は，この自立した貨幣，すなわち貨幣商品金を眼前におくことによって，《諸商品と関連しての金》(118，訳124)とは何かという問題に突き当り，この問題提起によってここに認識の呪縛は一挙に解かれるのである。

いわく，《もし私が綿花1ポンドが8ペンスに値するというなら，私は1ポンドの綿花は1/116

オンスの金(1オンスは3ポンド17シリング7ペンス)(631ペンス)に等しいといっていることになる》(同上，訳123)。実に，この一文は，『要綱』貨幣章における1個の記念すべき一文である。ここにおいて，かの冒頭におかれた《商品 $a=1$ シリング云々》という価値関係式がその真に意味するところに還元されたからである。《われわれがここで問題にしようとした論点，つまり諸商品に関連しての金という論点は，金が尺度単位として固定されるべきである限り，バーターによって，他のすべての商品相互の関係と同じように，直接的物々交換によって決定される》(118，訳124)。すなわち，《商品 $a=1$ シリング云々》とおくかわりに，《1シエッフェルの小麦はこれこれシエッフェルの裸麦に値する》(119，訳125)とおくことができるし，またおかなければならないのである。

かくしてわれわれはここに，初発とは全く異なる定式を手にする。《商品は，他の一つの商品で表現され，したがって関係として表現されるかぎりでのみ交換価値である。1シエッフェルの小麦はこれこれシエッフェルの裸麦に値する。このばあいに，小麦が裸麦で表現されるかぎりで，小麦が交換価値であり，裸麦が小麦で表現されるかぎりで，裸麦が交換価値である。2つのうちどちらかが自分自身にだけ関係するかぎりでは，それは交換価値ではない》(119-20，訳125)。

『要綱』における貨幣導出へのアプローチと貨幣導出の論理それ自体に価値形態論への展開を阻止する認識の呪縛をみてきたわれわれは，いまここに展開されつつある呪縛からの解放と価値表現の主体としての商品とこれに表現材料として相対する商品との関係という視角の拡大とを，根拠をもって[19]，価値形態論の萌芽が提示されつつあるものと確定することができる。ここに提示されつつある価値形態論の萌芽は，それが『資本論』中の何らかの文章に酷似しているがゆえにのみ萌芽なのではない。かかる萌芽さえもちえなかった経済学的意識が，もちえぬままに展開した貨幣導出の難点の中からついに到達し，脱皮しえた方向であるからこそ，これは価値形態論の萌芽なのである。かくして，ここで到達した認識が，自覚的に初発にさかのぼって適用されるべきことを『要綱』は宣言するのである。いわく，《このことは，交換価値そのものについて論ずる章から前提されなければならないことである》(118，訳123)と。

19) 経済研究所研究会で，本稿の内容を報告させていただいたさい，高須賀義博教授から，『要綱』に価値形態論のケルンがあるにしても，問題は，価値形態論そのものの展開が『資本論』第1巻の校正段階で初めて意識されたその秘密にあるのではないかという指摘をいただいた。この点については，いづれかの機会に解明すべきものと思っている。

(5)

以上，本稿では『要綱』それ自体の論理に密着して価値形態論の欠如からその展開の萌芽への歩みを追跡してきた。もとより，『要綱』貨幣章は，物神性論の展開，労働の2重性の発見など商品論として検討すべき課題は多い。だが，本稿では，ひとまず『要綱』における価値形態論志向の展開を『要綱』それ自体に即して検討するということを課題とし，ドラフトとしての『要綱』のひとつの解釈のタイプを提出しようとしたものである。何らかの貢献あれば，幸いである。

(一橋大学経済研究所)

参考文献

[1] Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858. Anhang 1850-1859*, Berlin 1953.

[2] ——日本語訳：高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』，5分冊，大月書店，1958-65。

[3] ——ロシヤ語訳：К. Маркс, Экономические рукописи 1857-1859 годов, в: Маркс и Энгельс, Соч., т. 46, чч. 1 и 11., 2-ое изд., 1968-69, Москва.

[4] ——フランス語訳：K. Marx, *Fondements de la critique de l'economie politique, ébauche de 1857-1858*, traduit par Roger Dangeville, Paris, 1968.

[5] ——英語訳：K. Marx, *Grundrisse, Foundations of the Critique of Political Economy (Rough Draft)*, translated with a Foreword by Martin Nicolaus, The Pelican Marx Library, 1973.

[6] K. Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, in: Marx/Engels, *Werke*, Bd. 13.(日本語訳『マルクス・エンゲルス全集』第13巻)

[7] ——, *Das Kapital*, Erster Band, 1. Aufl., Hamburg 1867.(Aoki-Shoten-Ausgabe).2., verbesserte Aufl., Hamburg 1872.

[8] ——, *Das Kapital*, Erster Band, in: Marx/Engels, *Werke*, Bd. 23. (日本語訳『マルクス・エンゲルス全集』第23巻)

[9] 遊部久蔵「『経済学批判要綱』における商品論」,『三田学会雑誌』, 63巻5号。

[10] 深町郁弥「所有と信用』, 日本評論社, 1971年。

[11] 石垣博美「『経済学批判綱要』における方法論の一考察」(所収, 玉城・末永・鈴木編『宇野弘蔵先生還暦記念論文集・マルクス経済学体系』上巻, 岩波書店, 1957年)。

[12] 小林弥六「価値等式と交換過程」(所収, 鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』, 青木書店, 1959年)。

[13] 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』, 岩波書店, 1957年。

[14] 大内秀明『価値論の形成』, 東京大学出版会, 1964年。

[15] Projektgruppe Entwicklung des Marxschen Systems, *Das Kapitel vom Geld——Interpretation der verschiedenen Entwürfe*, Verlag für das Studium der Arbeiterbewegung, Westberlin 1973.

[16] Reichelt, Helmut, *Zur logischen Struktur des Kapitalbegriffs bei Marx*, 4., durchgesehene Aufl., Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt/M. 1973.

[17] Richter, Horst/Rolf Sieber, *Die Herausbildung der marxistischen politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin 1969.

[18] Rosdolsky, Roman, *Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen 〉Kapital〈. Der Rohentwurf des 〉Kaital〈 1857–1858*, 2., überarbeitete Aufl., Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt/M. 1969. (時永・平林・安田訳『資本論成立史』, 法政大学出版局, 1973–4)。

[19] 佐藤金三郎「『経済学批判体系』と『生産一般』」,『経済学雑誌』, 39巻6号。

[20] 高木幸二郎「商品の価値と価格」(所収, 渡辺佐平編『インフレーション理論の基礎』, 日本評論社, 1970年)。

[21] Tuchscheerer, Walter, *Bevor „Das Kapital" entstand. Die Herausbildung und Entwicklung der ökonomischen Theorie von Karl Marx in der Zeit von 1843 bis 1858*, Akademie-Verlag, Berlin 1968. (宇佐美誠二郎監訳『初期マルクスの経済理論——資本論成立前史(上)』, 民衆社, 1974年, 下巻未刊)

[22] 米田康彦「1850年代におけるマルクスの『労働の2重性』把握」,『商学論集』, 38巻1号。

[23] Zelený, Jindřich, *Die Wissenschaftslogik bei Marx und „Das Kapital"*, Akademie-Verlag, Berlin 1968.

季刊理論経済学　第25巻第3号　発売中

《論　文》

工藤和久・藪下史郎: 公害の経済分析: 展望

福地崇生: 開発金融の過疎防止効果
——北海道東北モデルによるシミュレーション分析——

Eiji Nezu: Optimal Fiscal Policy in a Growing Economy

《覚書・評論・討論》

Makoto Ohta: A Note on the Duality between Production and Cost Functions: Rate of Returns to Scale and Rate of Technical Progress

Yoshinori Morimoto: Neutral Technical Progress and the Separability of the Production Function

瀬岡吉彦: 破産の可能性と企業価値

B5判・80頁・500円　理論計量経済学会発行／東洋経済新報社発売